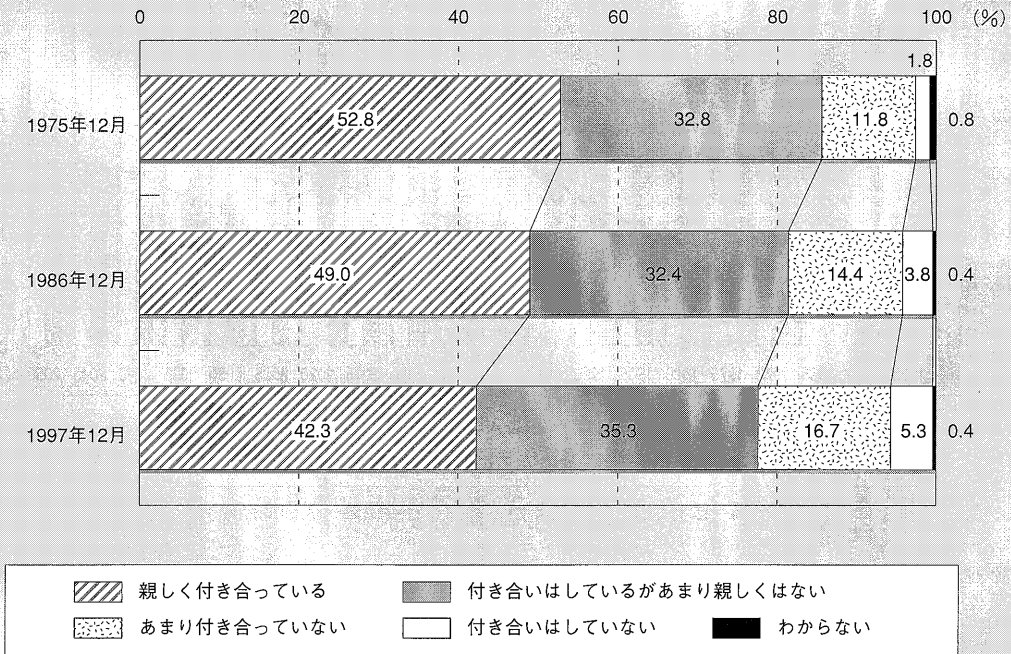


## <白書分析の視点>

戦後の高度経済成長による核家族化の後、現在では高齢者の単独世帯が増加している。また、高度経済成長は地域社会の姿も変え地域社会の人間関係はしだいに希薄化してきた。(図表序-8)

図表序-8 近所付き合いの程度



資料：内閣府「社会意識に関する世論調査」

現代の高齢者たちは、子どもや孫とは別々に暮らし、地域社会とのつながりも薄いなど、ある意味ではさまざまな人間関係から「自由」である反面、別の見方をすればそうした人間関係から「切り離されて」いるようにもみえる。長くなった老後が高齢者はどのように過ごしているのだろうか。また、この期間を「第2の現役期」としていきいきと送るためにはどのような条件整備が求められるのだろうか。

高齢期においては、こうした「活力」のみならず、「安心」の視点も重要であり、特に「介護の長期化」や「介護する側の高齢化」など介護に関わる問題は重要課題である。施行後3年を経過した介護保険制度の実績はどのように評価され、その上で今後の展望をどう考えるのか。

一方、現役世代は、家族形成という大事な局面において、仕事が忙しくて家庭を顧みる余裕もない上に、前述のような核家族化や地域とのつながりの希薄化の下で、子育てに対する支えが不足しており、それが少子化を助長しているのではないかと指摘もある。少子化をめぐる家族や地域の実態はどうなのだろうか。またこうした問題に社会全体としてどう対応していくのだろうか。

仮に、現役世代がさまざまな課題を抱えているとすれば、その解決のために高齢者の活力をもっと生かすことはできないのだろうか。それが可能であれば、高齢者自身の生きがいにもつながり、同時に現役世代の抱える問題の軽減をももたらし、「世代間の新たな支え合いの構図」が可能になるのではないかと。